第2回マレーシア・ジャパン・プラスチック・コンファレンス (2nd Malaysia-Japan Plastics Conference 2004) 報告

森 井 亨*

第2回マレーシア・ジャパン・プラスチック・コンファレンス (2nd Malaysia-Japan Plastics Conference 2004) は、2004年1月6、7日の2日間にわたって、マレーシア・クアラルンプール近郊のPutrajayaにあるPutrajaya Marriott Hotelにて開催された。Putrajayaは、いくつかの政府機関の建物がある現在も開発中の地域であり、かつリゾート地となっており、その中心に開催場所となったホテルが位置している。本会議は、マレーシア・プラスチック製造者協会 (Malaysian Plastics Manufacturers Association; MPMA) が主催し、プラスチック成形加工学会が日本からの講演者の紹介をサポートした形で、昨年の年次大会で特別講演をされた小西史彦氏が会長を務める Texchem Resources Berhad がスポンサーとして開催された。第1回は2001年に開催され、その際は高分子学会が日本側の主団体としてサポートしていたが、今回はその役目をプラスチック成形加工学会が担う形となり、筆者がこの日本側担当窓口を務めた。本会議のメインテーマは、“Plastics Technology & Smart Partnership for Global Competitiveness”であり、最新のプラスチック成形に関する研究・技術情報を交換し、これをいかにしてマレーシアにおけるプラスチック製造業に反映するか、というものである。その目的のもと、マレーシア、日本だけでなく、米国をはじ

めとする諸外国からも講演者を招き、種々のプラスチック成形技術に関する講演が行われ参加者は200名を越え、非常に盛大な会議となった。会議は、第1日に一般的なトピックに関して1会場で、第2日の午前は“Break-Away Session”として、「射出成形」、「ブローおよび押出成形」、「その他」の3セッションに分かれて3会場で、午後はプラスチック成形のトレンドに関して再び1会場で行われた。参考に本会議第1日のプログラムの抜粋を表1に示す。また本会議には、マレーシアのプラスチック関連企業の展示ブースも併設されていた。

会議の開催に先立つオープニングでは、スポンサーであるTexchemグループの小西会長が本会議の目的に関して挨拶をされ、引き続き主催者であるMPMAを代表して、会長であるC. Chen氏、駐マレーシア日本大使代理の挨拶があった。そして、本会議の開会の挨拶が来賓として招かれたマレーシア・通産大臣のYB Dato' Seri Rafidah Aziz氏により行われた。図1は開会式時のステージの様態であり、演壇に立っているのが通産大臣、着席している左から本会議の実行委員長であるA. K. M. Ghazali氏、Chen氏、小西会長である。日本で開催される国際会議で大臣が挨拶にやってくるということは到底考えられないことであり、このことだけを見ても本会議のマレーシアでの重要性が見て取れる光景であった。また大臣の挨拶の中で、MPMAはマレーシアにおける業界団体の中で最大の団体であるとのことで、このこともマレーシアにおけるプラスチック産業が非常に重要な位置を占めていることが伺える。

第1日の講演は、一般的なトピックとして表1に示したように、マレーシアから3件、日本から3件、米国から1件の講演が各45分ずつ行われた。講演の詳細についてはここでは割愛するが、各講演において、10分程度の質疑応答の時間が設けられ、どの講演においても活発な議論がなされ (図2)、マレーシアのプラスチック産業が現在おかれている状況に対する危機感と、より良いものを作るための情報を少しでも得ようという雰囲気が伝わってきた。また講演者および座長には、記念品としてマレーシアを代表する錫の製品であるRoyal Selangorのフォトフレームやタンブラーが送られ、ここでの講演が非常に名誉あることとされていることが実感された。

第1日目終了後には、マレーシア側主要メンバーと講演者との間で会食が持たれた。その際には、駐マレーシア日本大使である小西大使も出席され、またホテルのレストラン

図1 開会式の列席者

* Morii, Tohru
湘南工科大学マテリアル工学科
藤沢市辻堂西海岸 1-1-25 (〒251-8511)
2004.2.20 受理

表1 第1日目および第2日午後のプログラムの抜粋

第1日
Texchem グループ小西会長挨拶
MPMA 会長挨拶
駐マレーシア日本大使（代理）挨拶
マレーシア通産大臣 開会の挨拶
Natural Rubber-Based Thermoplastic Elastomer and High Impact Polystyrene, Dr. A. S. Hashim (Universiti Sains Malaysia)
Polymer Processing from National Nanotechnology Project in Japan, 井上隆氏（山形大学）
Can Technology Solve the Global Plastics Litter Situation?, Mr T. Kingsbury (Dow Chemical, USA)
Polymer for Biomedical Applications, Prof. C. C. Ho (Asian Institute of Medicine, Malaysia)
Biodegradable Poly lactile Noncomposites : Open a New Dimension for Plastics and Composites, 岡本正巳氏（豊田工業大学）
Plastics Compounding for Automotive Applications, Prof. M. Nasir (Universiti Industri Selangor, Malaysia)
Recent Advancement of Polymer Processing and Mould Making Technology in Electronics Industry in Japan, 有吉秀穂氏（松下電器産業）
第2日
Styrenic Block Copolymer TPEs for Outdoor Flexible Cable & Cord Applications, Mr. S. Swaminathan (Teknor Apex Company, Singapore)
Food Packaging-Customers' Expectations & Future Applications of Plastics, Mr. L. S. Huat (Nestle (M) Bhd)
Asia Pacific As a Hot Spot of Global Engineering Plastics Industry, 岡田常義氏（ポリプラスチックス）
その他の日本側講演者
上園裕正氏（日本製鋼所）、濱田泰以氏（京都工芸繊維大学）、U. S. Ishiaku 氏（京都工芸繊維大学）、森井（湘南工科大学）

ンを貸し切りで使用したこともあり、和やかな雰囲気の中にも非常に格式高い会食となった。図3は会食前の歓談風景であり、写真左が小西大使、右が小西会長である。この席上、大使が挨拶されたが、Texchem グループの小西会長と名字が同じこともあるのか、非常に親交が深いようであり、それを反映してか、本会議の全面的なサポートと、マレーシアー日本の間でのこのような交流が今後も継続することを希望している旨の話しをされ、また次回を開催する場合の打合せの会議には大使公邸を使ってください、というありがたい申し出もあり、大使もこのような二国間会議の重要性を謳っておられた。

第2日は、前述のように“Break-Away Session”として、「射出成形」、「ブローおよび押出成形」、「その他」の3セッションに分かれて3会場で講演が行われた。セッションにより部屋の大小は異なったが、どの講演会場もほぼ満席となり、第1日に引き続き活発な議論が行われ、講演終了後のコーヒブレイクの際にも各講演者を捕まえて、講演の内容だけでなく、より実践的な成形への応用やトラ

図2 会場の風景

図3 会場の風景

ブルの対処法など、細かな内容の質問をする光景も見られ、各企業において様々な問題に直面していることも伺えた。また、午後のセッションにおいても、第1日目同様非常に盛況であり、最後まで帰路につく聴講者はほとんど見られなかった。

今回の会議全体を通して、中国や他の東南アジア諸国のプラスチック産業の成長に伴い、マレーシアのプラスチック産業は押され気味であるが、その現状を何とか打破しようと必死であること、そのような中でもマレーシアにおけるプラスチック産業は非常に活発であること、などがうかがい知れた。そのような姿勢は、講演中の聴講者の視線や、積極的な質疑応答などからも、容易に推し量れた。マレーシアがおかれている現状に対する危機感是非常に強く、このことが日本との交流を積極的に行っていくという目的の原動力のようである。そのため、すでに2年後に再び本会議を開くこと、またその際にも今回と同様にプラスチック成形加工学会に協力願いたいことなど、いくつかの提案・相談がなされた。アジアにおけるプラスチック産業の中心を担っていくべき日本としては、マレーシアだけでなく、他のアジア諸国ともこのような良好な関係を築きつつ、切磋琢磨していくことが重要であるであろうことが実感された会議であった。また、この場をお借りして、年始のお忙しい時期に時間を割いて本会議の開催にご協力いただいた日本側講演者の皆様、およびマレーシア滞在中にお世話になった Texchem-Pack 社の五十嵐篤氏に感謝の意を表したい。